

恋愛・結婚の衰退とバーチャル関係の興隆



山田 昌弘（やまだ まさひろ）
中央大学文学部教授

■略歴

- 1981年 東京大学文学部卒業
- 1986年 東京大学大学院社会学研究科博士課程 単位取得退学、東京学芸大学社会学研究室助手、専任講師、助教授を経る
- 2004年 東京学芸大学教育学部教授
- 2008年4月より 現職
(1993年 カリフォルニア大学バークレー校社会学部客員研究員・文部省在外研究員)
- (2014年 香港中文大学 ジェンダー研究所客員教授)

■専門

家族社会学、感情社会学、ジェンダー論

■主な著書

- 「出会いと結婚（家族研究の最前線2）」共編著（日本経済評論社、2017）
- 「モテる構造：男と女の社会学」（筑摩書房、2016）
- 「結婚クライシス：中流転落不安」（東京書籍、2016）
- 「家族」難民：生涯未婚率 25%社会の衝撃」（朝日新聞出版、2014）
- 「「婚活」症候群」共著（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2013）
- 「「婚活」時代」共著（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2008）

【要 旨】

- 日本では未婚化が進んでいるだけでなく、交際相手をもつ人も減少している。更に、恋愛意欲の減退もみられる。近代社会においては、夫婦や恋人で親密欲求（コミュニケーション、ロマンティック感情、性的欲求）が満たされると仮定されてきた。では、配偶者や恋人がいない未婚者はどのような親密関係を築いているのだろうか。その一つの方法がバーチャル恋愛、擬似恋愛であると仮定し、調査結果からその実態を報告するものである。
- 調査では、次の5つのカテゴリーを用意して、若年層のバーチャル関係の実態に関して質問している。Aペット、Bキャバクラ・メイドカフェなど、Cアイドルやタレント、スポーツ選手など、Dアニメ、ゲーム等のキャラクターなど、E性的サービス産業（風俗）。
- 調査では、20-34歳の若者のうちの約30%がこのカテゴリーのどれかに恋愛感情を投影していることがわかった。男性は、未既婚や年代別で割合に有意な差はないのに対し、女性は若いほど、未婚者ほど、そして、非正規雇用者ほど、割合が高いことがわかる。
- 本調査からは、男女でバーチャルな関係性の位置づけが異なる傾向があるという結果が得られた。男性はバーチャル関係を、現実の恋愛とは別のもの、もしくは補完するものと捉えている傾向がある。一方女性はバーチャル関係を、現実の恋愛の代替関係と捉えている傾向が強い。男性に比較して、親密性を一つの対象に集中させる傾向があり、リアルな対象を得るとバーチャル関係は不要になる傾向があることがわかった。

I. はじめに — 結婚、男女交際の衰退

日本では、1975年以降、未婚化が進行し、未婚者が増加している。国勢調査によると、30歳から34歳までの未婚率は、1975年では男性14.3%、女性7.7%であったのが、2015年には、男性47.3%、女性34.5%にまで増大している。

また、今世紀に入ってから、未婚者間での男女交際も減少している。国立社会保障人口問題研究所の出生動向基本調査によると、未婚者のうち、恋人として交際している相手がいる人（婚約者含む）の割合は、2005年には男性27.2%、女性37.0%であったものが、2015年には男性21.3%、女性30.2%まで低下している。

更に、同調査では、2010年と2015年に交際相手がない未婚者に、交際相手が欲しいかを聞いている。2010年では、欲しいと回答した人は、男性53.1%、女性51.9%であったが、2015年では男性45.7%、女性44.0%と5割を切るようになった。

つまり、1975年以降配偶者がいない若者が増え、2000年以降は恋人もいないし、恋人をもつ意欲もない未婚者が増大しているということである。

これは、欧米の状況と大きく異なっている。確かに、欧米においても結婚する人が減っている。その代わりに、同棲など結婚せずに一緒に暮らす人が増え、未婚で出産する女性も増えている。フランスやスウェーデンでは、未婚女性から生まれる子どもの割合（婚外子率）は、50%を超えた。また、同性同士でつきあったり結婚する人も増えている。つまり、カップルを形成する力は衰えていない。

しかし、日本では、同棲中の未婚者は同調査でも1.8%にすぎない。恋人もいない人が増えているだけでなく、恋人をもちたいというカップル形成意欲の低下もみられる。

近代社会では、幸福な生活を送るために、配偶者や恋人など、親密なパートナーが不可欠だと考えられてきた。では、配偶者も恋人もいないし、欲しくないという人は、親密関係をどのように形成したり、また、形成しようとしているのだろうか。

本論文では、明治安田生活福祉研究所が行った2017年の調査データを用いて、配偶者や恋人に代わるような関係性、つまりは、バーチャルな関係性が、若者の恋愛行動にどのような影響を与えているかを考察していきたい。

II. 調査の概要と対象者の恋愛関係

1. 調査の概要

まず、分析に用いる調査の概要を記しておく。本調査のデータは、明治安田生活福祉研究所が2017年3月に行った「男女交際・結婚に関する意識調査」によるものである。インターネットモニターのデータに基づき、15歳から34歳の若者（ただし、24歳未満の既

婚者は除いている) を対象としている。サンプル数は 10,304 人で、男女、年代、未既婚によって 12 カテゴリーに割りつけられている。割りつけ人数は以下の通りである。割りつけ調査のため、本論文では全体の集計はせずに、各カテゴリー間の比較を通じて分析、考察を行っていく。

図表 1 対象者のサンプル構成

		(人)					
		15-19歳 未婚	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性		876	1,494	824	567	824	567
女性		876	1,494	824	567	824	567

出所：明治安田生活福祉研究所「男女交際・結婚に関する意識調査」(2017年)より作成。
以下の図表につき同じ

2. 恋人の有無

まず、対象者の恋愛関係をみていく。未婚者のみに限って恋人の有無を質問している。本調査では、恋人が一人または複数いるかも聞いている。

図表 2 恋人の有無

		(%)			
		15-19歳 未婚	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	30-34歳 未婚
男性	一人	19.5	29.2	29.2	21.5
	複数	0.5	1.0	1.1	1.2
女性	一人	23.4	41.6	46.2	35.9
	複数	0.3	0.4	0.6	1.1

男女とも国立社会保障人口問題研究所の出生動向調査 2015 年に比べてやや高い数字が出ている。20 代では、男性の 3 割、女性の 45% が恋人がいると回答している。また、男性より女性の方が恋人あり率が高いのは、既存調査と同様の結果を示している。

20 代後半で恋人あり率がピークとなり、30 代前半で減少するのは、20 代で恋人がいた人の一定割合が 20 代後半に結婚してサンプルから除かれることが反映している。

複数恋人がいる割合は、30-34 歳男性で 1.2% となっており、つきあっている人の約 5% を占めるが、他はそれ以下である。各年代、男性の方が女性よりも多い。恋人ありに含めて分析することにする。

3. 恋人獲得意欲

次に、恋人がいない人に、恋人が欲しいかを聞いている。結果は以下の通りである。約3分の2が欲しいと答えている。これも、出生動向調査2015年に比べてやや高い数字が出ている。女性は年代による違いはあまりないが、男性は、25歳以上の層で欲しくないと答える人が増えている。その結果、25歳以上の層では、恋人獲得意欲に男女間に10ポイントの差がついている。

図表3 恋人が欲しいかどうか（恋人がいない人のみ）

(%)

		15-19歳 未婚	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	30-34歳 未婚
ほ し い	男性	67.8	67.8	62.7	62.0
	女性	69.9	70.7	74.2	71.7

Ⅲ. バーチャル関係(疑似恋愛)とは何か

1. パートナーとの親密欲求

ここで、バーチャルな関係、疑似恋愛の位置づけについて考察をしておきたい。

近代社会では、恋人や夫婦は愛情で結ばれた関係と位置づけられてきた。しかし、愛情の中身に関しては、深く考察されてきたとは言い難い。

人は、配偶者もしくは恋人（親密なパートナーと呼んでおく）に情緒的に何を求めるのだろうか。ここでは、パートナーに対する親密欲求を三つの要素に分けて考察を試みたい。

① コミュニケーション欲求

自分の感情や意見を理解してもらいたいという欲求。主に、言語的会話によって満たされる。

② ロマンティック感情

相手のことを知りたい、相手に接近し、独占したいという欲求。相手への接近、相手からの承認によって満たされる。

③ 性的欲求

性的欲望の対象として、性的関係をもちたいという欲求。様々な形の性的関係によって満たされる。

もちろん、親密関係の全てがこの三要素で尽くされるというわけではない。ただ、恋愛という場合、この三要素が含まれているものとして考察していきたい。そして、これらの欲求が充足されると、「自分が必要にされ、大切にされているという感覚」、人間が人間ら

しく生きていくために必要な感覚が得られるということを仮定しておく（山田昌弘『迷走する家族』参照）。

近代社会においては、配偶者もしくは恋人がいれば、この三種類の欲求が「お互いに」充足されるはずというイデオロギーが広く信じられている。結婚相手、もしくは恋人とお互いの感情をシェアし、お互いにロマンティックな感情を抱いて接近し承認し合い、相手を独占しながらお互いに性的満足を得るというものである。

もちろん、現実には、この三要素が必ずしも揃っているわけではない。恋人（夫婦）の一方は満足だがもう一方は満足できないというケースもあるだろう。また、日本ではセックスレスカップルも増えており、夫婦であるからといって、この三要素が自動的に満たされるわけではない。あくまで、理念的なものである。

2. パートナーがいない人の親密欲求

逆に、恋人も配偶者もない人は、どのように親密欲求を充足しているのだろうか。また、恋人や配偶者がいてもこのような欲求を部分的に、もしくは全て充足できない場合はどうするのだろうか。

理論的には、二つの選択肢がある。一つは、全てを満たすような相手を見つけようと努力する、パートナーがいる場合は相手を取り替えることも含む。これを通常、恋人をもつ、もしくは、結婚する動機となる。

もう一つは、これらの欲求を分解して、別々の相手によって充足するという選択肢がある。そして、それを「市場」で購入するなど一方的に充足させることも選択肢に含まれる。例えば、コミュニケーション欲求はキャバクラのキャストと会話することによって満たし、ロマンティック感情はアイドルに対して満たし、そして、性的欲求は風俗産業で満たすという人もいるだろう。

そこで、配偶者や恋人以外で、以上の欲求を満たす関係をここでは「バーチャルな親密関係」略してバーチャル関係と名付けておく。通常、「バーチャル恋愛」は、いわゆるアニメの架空の登場人物などにあこがれたり、ポルノビデオなどを見て性的に充足する場合に用いられることが多い。いわゆる「二次元」と呼ばれるものである。しかし、ここでは、用法を広く考えて、必ずしも架空の存在、メディア上だけの関係だけでなく、一時的に恋人気分をひたすために利用する配偶者や恋人を擬製した関係として、使用することにする。

そして、パートナーがいない人が増えている現代日本社会では、恋人をもちたいという意欲をもつよりも、バーチャルな関係性で親密欲求を満足させようとする若者が増えていると考えられる。

3. バーチャルな関係性が満たすもの

ここで想定する恋愛に関する欲求に関わるバーチャルな関係性は次の通りである。

- ① コミュニケーション欲求を満たすものとしては、親やきょうだいなど家族、友人などが具体的に挙げられるだろう。人によっては、ペットもその範疇に入る。また、キャバクラのキャストやレンタル・フレンドのように、一時的に、もしくは断続的に市場からサービスを買うという形でコミュニケーション欲求を満たすことも可能だ。いわゆる飲食店（バーや飲み屋）の経営者、従業員などに対して、「愚痴をこぼす」といったものも、飲食代に含まれるという意味で、コミュニケーション欲求を満たすものも含まれる。
- ② ロマンティック感情は、ある特定の対象に対し、接近し独占したいと思い、相手からの何らかの承認を求める欲求とここでは定義する。これは、「好きになる」「惚れる」とほぼ同義語である。それが具体的な身近な人間に向かえば、恋愛感情となる。しかし、具体的であっても、キャバクラやメイドカフェのキャスト、ホストクラブのホストなど、こちらがロマンス欲求を抱いても相手は対価を伴ったサービスとしてその欲求を満たしているケースもあるだろう。また、リアルな存在であっても、アイドルやスポーツ選手のように、メディアの中でしか見ることができないケースもある。そして、アニメやゲームのキャラクターなど、二次元と言われるように、バーチャルな存在であることもあるだろう。その場合は、この感情を一般的に「萌え」と呼ぶことがある。イスラエルの社会学者、イルーズは、ロマンティックな感情を購入して満たすことを「ロマンティック・ユートピアの消費（Consuming the Romantic Utopia）」と名付けて分析している。
- ③ 性的欲求は単なる身体的快楽を伴うが、単に身体的なものに還元できない。性的興奮から身体的満足を得るためには、対象に対する「性的興奮」が不可欠だからである。だから、相手が誰でもよいというわけではない。相手が恋愛対象であれば、それに性的興奮が伴う場合が多いだろうが、それは必ず生じるとは限らない。いわゆるプラトニック・ラブのように、相手は親しくて好きだが、性的関係を求めない場合もあるだろう。

このカテゴリーには、主に男性は、いわゆるポルノグラフィーによって性的興奮を得るケースがあり、これはバーチャルな関係での満足とすることができる。そして、性風俗産業で性的サービスを買って、一時的に、性的興奮から性的に満足を得るケースがある。

IV. バーチャル関係の実態

1. バーチャル関係の実態

現代社会においては、恋人や配偶者でなくても、様々な親密感情を満たすことができる「装置」といふべきものが存在する。これを先に述べた通り、バーチャル関係と呼んでおく。

本調査では、5つのカテゴリーを用意して、若年層のバーチャル関係の実態に関して質問している。それは、次の5カテゴリーである。

- A ペット
- B キャバクラ・メイドカフェなど
- C アイドルやタレント、スポーツ選手など
- D アニメ、ゲーム等のキャラクターなど
- E 性的サービス産業（風俗）

これらを恋愛の対象にしているかどうかを聞いている。もちろん、これだけがバーチャル関係の対象ではないことに留意する必要がある。例えば、ポルノグラフィ視聴などは項目に入れていない。

では、このバーチャルな存在を恋愛対象にしている人の割合はどれくらいなのか。単純集計をみると、平均すれば若者の3割程度であることがわかる。

図表4 一つでも「当てはまる」につけた人の割合

	(%)				
	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	30.9	29.0	28.9	30.8	28.4
女性	29.9	28.6	24.2	27.1	19.9

男性と女性でその傾向に大きく差があることがわかる。

男性は、年齢、未既婚で、有意な差はみられず、30%前後で安定している。しかし、女性は、既婚者よりも未婚者の方が、そして、年長よりも若年である方が、バーチャル関係を経験する割合が高い。20代以上の未婚者で約3割、しかし、30代前半の既婚者では、19.9%に低下する。

現実には親密なパートナーがいれば、親密欲求は満たされているはずで、バーチャル関係には向かわないというのが、一般的な考え方である。しかし、女性にはこの傾向がある程度当てはまるが、男性では、年齢や未既婚に関する有意な関係は見いだされなかった。

更に、働き方や基本属性でみると、学歴や雇用形態が大きく関係している。

学歴は男女とも学歴が低いほど、バーチャルな存在に恋する割合が高い。ケース数が多い高卒と大卒で比べたのが図表5である。女性の大卒は約2割で一定である。しかし、高卒は女性既婚と未婚では大きく違うことがわかる。高卒未婚女性は、どの年代でも、3分の1以上の人が、バーチャル関係をもつことがわかる。

図表5 学歴別 バーチャル関係をもつ人の割合

		(%)				
		20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	高卒	39.4	34.2	32.6	31.1	33.3
	大卒	30.3	30.2	24.6	27.0	26.9
女性	高卒	37.0	36.4	25.0	35.9	19.4
	大卒	20.1	21.9	20.2	19.1	19.2

次に雇用形態だが、本調査では既婚男性の大部分が正規雇用である。未婚男性の場合には、30代前半で、パートアルバイトが高いほかは、大きな差はみられなかった。

一方、女性は雇用形態による差が大きかった。未婚女性20代前半では、正規雇用20.6%、大学生が28.8%なのに対し、パートアルバイト34.3%、契約社員42.2%、専門学校生48.1%、無職51.5%。20代後半でも、正規雇用21.8%に対し、契約社員37.8%、パートアルバイト37.4%、無職47.1%と割合が高くなっている。既婚女性でも、20代後半正規雇用16.5%、パートアルバイト26.7%、専業主婦25.7%、30代前半正規雇用11.1%、パートアルバイト16.7%、専業主婦22.8%となっている。共働きの既婚女性が、最もバーチャル関係から遠いところにいることがわかる。

仕事にも家族にもアイデンティティを見いだせない女性が、バーチャル関係に行く可能性が高いと推察される。

また、親密な相手がいれば、バーチャル関係に頼る必要はなくなるので、未婚者の中では、恋人がいない人の方がいる人よりもバーチャル関係をもつ割合が高い。この傾向は、女性により顕著である(例、20代前半 男性恋人有25.7%、恋人無33.2%、女性恋人有22.5%、恋人無35.3%)

このように、バーチャル関係と基本的属性との関連をみると、男性は学歴のみが有意な差を示す。女性においては、その属性によって大きな差があることがわかる。

女性は、バーチャル関係はリアルな夫や彼氏の「代替」関係とみなす傾向が強いのに対し、男性は、彼女や妻の有無に関わらず、バーチャル関係をもつ割合が女性よりも多い傾向にある。

2. バーチャル関係の種類

具体的に、各関係について簡単に触れておく。

図表6 各バーチャル関係につけた人の割合

A ペット (％)

	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	4.4	3.8	5.3	3.3	4.1
女性	4.4	5.6	3.2	7.2	2.2

B キャバクラ・メイドカフェなど (％)

	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	5.7	7.5	13.8	9.8	13.1
女性	1.1	1.1	1.9	0.8	1.4

C アイドルやタレント、スポーツ選手など (％)

	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	13.3	13.6	12.5	12.5	11.8
女性	19.2	17.6	16.8	16.1	13.9

D アニメ、ゲーム等のキャラクターなど (％)

	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	16.3	13.1	5.8	13.8	5.8
女性	15.5	15.2	11.8	12.0	7.4

E 性的サービス産業（風俗） (％)

	20-24歳 未婚	25-29歳 未婚	25-29歳 既婚	30-34歳 未婚	30-34歳 既婚
男性	7.8	11.2	11.8	13.7	14.6
女性	0.9	0.7	0.7	0.8	1.1

図表 7 最も熱中しているものの割合

【男性】 (％)

	ペット	キャバクラ他	アイドル他	キャラクター他	性産業
20-24歳 未婚	2.8	2.1	9.1	12.9	4.0
25-29歳 未婚	1.7	3.0	8.7	8.4	7.2
25-29歳 既婚	3.7	6.9	7.4	3.7	7.2
30-34歳 未婚	1.8	4.5	6.7	9.2	8.6
30-34歳 既婚	1.6	6.0	7.8	3.0	10.1

【女性】 (％)

	ペット	キャバクラ他	アイドル他	キャラクター他	性産業
20-24歳 未婚	2.9	0.5	14.7	11.2	0.5
25-29歳 未婚	3.8	0.2	13.6	10.9	0.2
25-29歳 既婚	2.6	1.1	12.5	7.9	0.2
30-34歳 未婚	5.3	0.2	12.1	8.6	0.7
30-34歳 既婚	1.9	0.5	11.6	4.9	0.9

図表 6 の 5 つのカテゴリに関して、簡単に見ていこう。

ペットは、割合は高くないが、30代前半の未婚女性で7.2%と多くなっているのが、目につく。

キャバクラやメイドカフェ、性的サービス産業のような、リアルな人からサービスを受けるバーチャル関係は、男性の方が女性よりはるかに高く、女性はほとんどいないことがわかる。また、この二つのカテゴリは、未婚男性よりも既婚男性の方が多くのも特徴的である。特に、30代前半の既婚男性は14.6%の人が性的サービス産業従事者に恋愛感情を抱いていることがわかる。また、未婚男性でも恋人がいる人の方がつける割合が高い（表省略）。つまり、男性の中で、一時的であってもリアルな存在に恋愛感情を抱き、関係を築くのは、既婚者や恋愛経験がある男性の方が、しやすいということであろう。

男性にとっては、バーチャルな関係性は、恋人や配偶者の代替というより、足りない欲求を補完するものと位置づけている人が多いということができる。

一方、アイドルやタレント、スポーツ選手のような「スター系」は、女性の方が男性より多い。男性、女性ともに数字が安定しているのが特徴である。

アニメやゲームのキャラクターに関しては、男女とも、年齢、および、未既婚の差が大きく、年齢が若いほど、そして、未婚であるほどバーチャル関係をもつ割合が高い。

V バーチャル関係と婚活

1. バーチャル関係と恋愛意欲

バーチャル関係とリアルな恋愛、結婚意欲に関しては、双方向の関係が想定される。バーチャル関係で満足しているがゆえに、恋愛・結婚への意欲が湧かないという方向、そして、恋愛・結婚でうまくいかないから仕方なくバーチャル関係で満足するという方向性である。

本調査では、バーチャル恋愛、疑似恋愛に当てはまると回答した約3割の人に、現実の恋愛に関する関心を6つの選択肢に分けて聞いている。

図表8 現実の恋愛に関する関心

- ① バーチャル恋愛は好きだが、現実の世界では現実的な恋愛をしたい
- ② バーチャル恋愛の相手と同じレベルの魅力をもつ異性としかつきあいたくない
- ③ バーチャル恋愛が楽しく、現実の恋愛には興味がない
- ④ 現実の世界ではもてないので、バーチャル恋愛に熱中している
- ⑤ 恋愛に関するトラウマをひきずっており、バーチャル恋愛に熱中している
- ⑥ 現実の恋愛は面倒またはリスクが高いと思うので、バーチャル恋愛で十分だと思っている

【男性】

(%)

	①	②	③	④	⑤	⑥	(N)
20-24歳 未婚	60.6	8.9	7.6	8.6	2.6	11.9	(462)
25-29歳 未婚	64.0	11.3	4.2	4.6	3.3	12.6	(239)
25-29歳 既婚	67.2	14.0	6.1	3.0	3.0	6.1	(164)
30-34歳 未婚	63.4	7.1	4.7	5.5	1.2	18.1	(254)
30-34歳 既婚	73.3	14.9	0.6	3.1	2.5	5.6	(161)

【女性】

(%)

	①	②	③	④	⑤	⑥	(N)
20-24歳 未婚	72.3	4.9	6.3	5.6	3.1	7.8	(447)
25-29歳 未婚	72.0	4.7	8.1	3.0	3.0	9.3	(236)
25-29歳 既婚	83.9	5.1	2.2	3.6	1.5	3.6	(137)
30-34歳 未婚	67.7	8.1	5.8	4.5	2.7	11.2	(223)
30-34歳 既婚	85.8	1.8	1.8	3.5	1.8	5.3	(113)

男女とも①、つまり、バーチャルな関係は一種の趣味として意識し、現実での恋愛関係

を求める人が過半数であることがわかる。その中でも多少差があり、バーチャル関係に熱中する人の中で、男性より女性が、未婚より既婚者の方が、リアルな恋愛を求めている傾向がある。

②-⑤の選択肢では、様々な理由で、現実の恋愛よりバーチャル関係の方を好む人たち、つまり、バーチャル関係を現実の恋愛の代替物と考えている人が多く含まれると考えられる。理由としては、既婚者の男性は、「バーチャル恋愛と同じレベルの魅力をもつ異性であれば」が多いが、他では、⑥現実の恋愛は「面倒またはリスクが高い」理由を選択している人がやや多いことがわかる。特に、30代前半未婚者では、男女ともこの理由が多くなる。

次に、前質問で②-⑤に回答した人、つまり、現実の関係よりもバーチャル関係を好む人たちに対して、追加で「今後、バーチャル、疑似恋愛より現実の恋愛に関心をもてると思うか」という質問をしている。

図表9 今後、バーチャル、疑似恋愛より現実の恋愛に関心をもてると思うか

【男性】		(%)			
	すぐにでももてる	少し時間が立てばもてる	当分はもてないと思う	よほどのことがないと もてない	(N)
20-24歳 未婚	19.2	40.1	25.8	14.8	(182)
25-29歳 未婚	18.6	40.7	20.9	19.8	(86)
25-29歳 既婚	28.3	58.5	13.2	-	(53)
30-34歳 未婚	12.8	34.4	24.7	28.0	(93)
30-34歳 既婚	25.6	60.5	14.0	-	(43)

【女性】		(%)			
	すぐにでももてる	少し時間が立てばもてる	当分はもてないと思う	よほどのことがないと もてない	(N)
20-24歳 未婚	16.1	35.5	28.2	20.2	(124)
25-29歳 未婚	12.1	39.4	31.8	16.7	(66)
25-29歳 既婚	31.8	45.5	13.6	9.1	(22)
30-34歳 未婚	29.2	26.4	23.6	20.8	(72)
30-34歳 既婚	37.5	31.3	25.0	6.3	(16)

ここでは、既婚者と未婚者で傾向が分かれた。既婚者では、「もてる」と回答した人が

圧倒的に多い。それに対し、男性は30代前半の未婚者で、「もてない」と回答する人が過半数となり、女性は20歳以上の未婚者全般で、半数近くに達している。

2. バーチャル関係と恋愛行動

では、現実にバーチャル関係をもっている人は、現実の恋愛に対してどのような行動をとっているだろうか。その結果、男性と女性では、正反対の結果が得られた。

まず、結婚活動をしているかどうかであるが、様々な婚活方法の中で、最も多かったのが、「友人に紹介を依頼する」であった。未婚者の中で、バーチャル関係をもっている人といない人で集計すると、男性はバーチャル関係をもつ人の方が、依頼している人が多く、女性は、バーチャル関係をもたない人の方が、有意に依頼している傾向が強い（表ではボリュームゾーンである20代後半未婚者のみ示した）。他の婚活行動でも同様の傾向がみられた。

男性は、そもそも親密関係を作る意欲が高い人と低い人がいて、高い人はバーチャル関係にも現実の恋愛関係にも積極的になる。一方、女性は、バーチャル関係があると現実の恋愛行動が消極的になる傾向があることがわかる。

図表 10 「友人に恋人や結婚相手の紹介を依頼した」割合

【20代後半】		(%)	
	男性	女性	
バーチャル関係あり	23.8	28.4	
バーチャル関係なし	19.3	33.3	

VI おわりに

日本では、未婚化、恋人がいない人の増大、および、夫婦の愛情関係の低下によって、「親密なパートナーがいない人」が増えている。その中で、バーチャルな関係性をもつ人が一定割合出てきている。

本調査からは、男女でバーチャルな関係性の位置づけが異なる傾向があるという結果が得られた。

男性はバーチャル関係を、現実の恋愛とは別のもの、もしくは補完するものと捉えている傾向がある。既婚、恋人の有無によって、バーチャル関係への影響は少ない。親密な関係を複数作り、また、作ろうとする傾向が観察される。これはリアルも含めた一つの関係性で親密性の全ての要素を満たすことができないため、親密性を複数の対象に分散させ満たそうとする一つの戦略とも考えられる。

一方、女性はバーチャル関係を現実の恋愛の代替関係と捉えている傾向が強い。男性と比較して、親密性を一つの対象に集中させる傾向があり、リアルな対象を得るとバーチャル関係は不要になる傾向がある。

もちろん、これは傾向性であって、男性でもバーチャル関係を代替と捉える人もいれば、女性で親密性を分散させている人も存在していることは留意する必要がある。

バーチャル関係と親密性の関係の分析は始まったばかりであり、今後の更なる分析が、日本社会の将来、とりわけ少子化問題を考えるに当たって必要になってくると考えている。このような調査、分析の機会を与えていただいた明治安田生活福祉研究所に感謝を示したい。

【参考文献】

- ・ 山田昌弘、白河桃子 『婚活時代』 (2008年、ディスカヴァー21)
- ・ Yamada, Masahiro 'Decline of Real Love and Rise of Virtual Love: Love in Asia' (2017年 IJJS)
- ・ 平井晶子、床谷文雄、山田昌弘 (編) 『出会いと結婚』 (2017年、日本経済評論社)
- ・ Illouz, Eva 'Consuming the Romantic Utopia' (1997年, University of California Press)